

# 妖怪の正体って？

妖怪とはいったい何者なのでしょう？

幽霊？自然現象？それとも気のせい？

いろいろな要因が考えられますが、実在する動物の生態と妖怪のしわざを照らし合わせることで、動物が正体なのでは？と思われる例をご紹介します。

その動物は、ムササビです。



ムササビの生態は、

- ① 日没後、樹から樹へと滑空する。
  - ② 飛んでいる時に飛膜を広げると座布団のような大きさになる。
  - ③ グルグル、キュルルと鳴く。
  - ④ 尖った爪、大きな尾をしている。
  - ⑤ 胡椒の粒くらいの大きさのフンを樹上です。
- などが挙げられます。

この特徴をいろいろな妖怪に当てはめると、

**鶴ぬえ** 平家物語にでてくる妖怪。夜に屋根に乗り、怪しい声で鳴く。頭はサル、胴はタヌキ、爪はトラ、尾はヘビのようである。(上記の生態①③④)

仙境異聞第三巻にでてくる妖怪。夜道を歩いていると風呂敷のようなものが飛んできて顔にはりついてしまう。イタチのようなものにひれがついていて節々に爪がある。(①②④)

**砂か婆** 水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」で有名な妖怪。旅人が神社などで野宿すると樹上から砂がはらりと落ちてくる。上を見上げると誰もいない。(⑤)

このように、かなりの特徴の一致がみられます。

現代では正体があはかれたと思われる「妖怪」もいるようです。しかし、ヒトの力ではかなわない自然の驚異や未知の存在は今もお感じられるのではないのでしょうか。「暗い森の中は危険がいっぱいだよ。」など、妖怪はヒトが自然の中で身を守る術を教えてくださいませんか。

参考文献：川道武男著（2015年）『ムササビ 空飛ぶ座ぶとん』筑地書館

# 奥多摩の野鳥

## ■ケリ

Vol.109



漢字名：鳧

レア度 ★★★★★

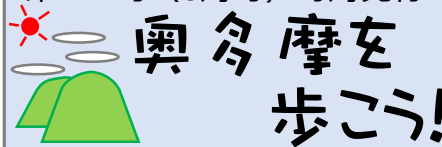
チドリ目／チドリ科

- 大きさ** 全長36cm
- なき声** 「ケリリ」
- 特徴** 雌雄同色。成鳥の夏羽は頭から頸が青灰色で胸は黒いが冬羽は淡色になる。目先に黄色の小さな肉塊がある。

**メ** 水田や畑、草地に生息している。繁殖期以外は、群で行動する。おもに昆虫類を採食する。

## H どこで観察できる？

- 国内：本州中・南西部や九州では留鳥。本州北部では夏鳥。
- 奥多摩：旅鳥。奥多摩では、多摩川での記録があるが、少ない。



奥多摩妖怪あつまれ!!



## 東京都 奥多摩ビジターセンター

URL: <https://www.tokyopark.or.jp/nature/okutama/index.html>

住所：東京都西多摩郡奥多摩町氷川171-1

電話：0428-83-2037

公益財団法人 東京都公園協会

お客様サポートセンター（協会の事業全般に関するお問い合わせ）  
電話：03-3232-3038 ※8:30～17:30（土日・祝日・年末年始を除く）



むか〜しむかしから山深い奥多摩には人智を越えた力を持つものたちが棲んでいると語り継がれてきました。

ここではそのようなものを総称して「妖怪」とよび、ご紹介します。

## ふるさとの伝承系

### 川天狗



小河内村にある淵に棲んでいて、人間に悪さをすることもなく、ただじーっと寂しげに川の水面を眺めていたそうです。ある時から、美しい女性のすがたをした川天狗と一緒に現れるようになり、通りかかった旅人が彼女に膳椀を貸すと、おれいにミミズが熱病に効くということを教えてくれたといわれています。

### 子どもと遊ぶお地蔵様

氷川にある薬師如来の石仏「ずはばの地蔵様」。子どもと遊ぶことが好きなので、石仏を転がして遊んでいる子どもを叱ると、叱った大人が熱を出したといわれています。



氷川にあるずはばの地蔵様



# 龍と大蛇伝説系

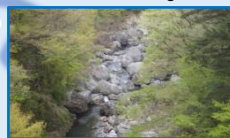
急峻な奥多摩にある谷や沢は、ひとたび大雨が降ると、まわりのものを飲み込んで暴れるほどの水流となり、まるで龍や大蛇のよう。そんな自然の驚異が背景になったので、と思われる伝説が数多く残されています。

### 海沢の大蛇

海沢向雲寺の前にある窪地が池だったころ、そこに棲んでいました。ある時この大蛇が天に昇り、その震動で池が決壊したそうです。大蛇は天に昇ったあとも池が恋しくなり向雲寺の裏山に居座り、化石となったといわれています。

### 惣岳の大蛇

シダクラ谷の惣岳河原に棲む大蛇。雷雨とともに現れ、一夜のうちに巨岩を川へ押し出してしまいう力を持っていたといわれています。



むかし道にある惣岳河原の巨岩

### 釜の滝の竜神さま

日原川にある「釜の滝」の滝壺に棲んでいて、滝にもが入ると怒って大雨を降らしたそうです。むかし、山火事の際に滝壺へ石を投げ入れたところ、大雨が降って鎮火したといわれています。

### 大蛇が癒した温泉

大蛇伝説の多い奥多摩には、大蛇が傷を癒したという「蛇の湯温泉」があります。江戸時代の書物にも記載があり、蛇が由来の温泉は国内では唯一です。

# 化ける動物系

数多くの動物たちがくらす奥多摩。その中には特別な力を持った動物も存在するのかもしれない。

### ネコおどり

むかし、三頭山を中心として、東は檜原城の平山氏、西は小管村の遠江守、北は小河内村の頭領杉田入道が対立し、にらみあっていました。ある春の満月の夜に狩人が三頭山にある沼地を通ると、100匹ものネコたちが東、西、北の三つのグループに分かれ、人間のように踊り、歌をうたっていたのです。その歌の内容が小河内村の入道に有利な情報だったため、それを狩人が伝えたことで小管の遠江守は倒されてしまったということです。



### 尾裂狐

大正のころ、川野地区の青木集落に住む子どもが熱を出したそうです。その子の様子がおかしいので、この辺りでは「オオサキ」と呼ばれている尾裂狐がついているのではないかといいことになり、法印さん呼んで狐落としをしたところ、うめき苦しんでいた子どもが優しい顔に戻り、元気になったということです。



参考文献：奥多摩民話の会(1987年)『おくたまの昔話 第一集』、奥多摩民話の会(1987年)『おくたまの昔話 第二集』、奥多摩民話の会(1990年)『おくたまの昔話 第三集』全巻奥多摩民話の会、奥多摩町誌編集委員会(1985年)『奥多摩町誌 民俗編』奥多摩町干葉幹夫(1995)『全国妖怪辞典』小学館、奥多摩町観光産業課(2016年)『奥多摩 山里歩き絵図』